

## 令和 7 年度 教員養成フラッグシップ大学フォローアップ実地調査報告書（案）

教員養成フラッグシップ大学推進委員会

大学名	大阪教育大学	調査日	令和 7 年 12 月 1 日（月）
調査委員	白水 始 委員、高橋 純 委員、山口 宏樹 委員（主査代理・大学担当）、添田 久美子 委員、若江 眞紀 委員		

## 大学関係者（責任者）からの説明

これまでの取組をとおして、教員不足解消へのアプローチとして、教職課程の必要単位数を一定の基準で減らすことも 1 つの方法ではあるが、養成する教員像に向けて選択科目を充実させる等、教職課程を含む学位プログラム全体をとおして教員を育成するべきだと考えている。

4 大学すべてが取り組んだ重点課題（ファシリテーターとしての教師の役割、省察的実践、教育データサイエンス・STEAM 教育、多様な子供への理解・対応力等）は特に重要で、教職課程を有するすべての大学において取り組むべき内容であるが、一方でカリキュラムオーバーロードを防ぐために、大学の強みや特色に応じてカリキュラムを編成することが重要である。

学内での横展開を進めるにあたって、学長指示のもと全員が参加できる組織として進めてきた。全学的なセンターが中心となって動くことも考えられるものの、トップダウンないしは学長補佐や部局長等が担うミドルアップダウンにて進めることも効果的である。

全国展開にあたっては、オンライン形式とりわけオンデマンドコンテンツによる提供は適していると考えられる。なお、オンライン（同時多方向型）形式で実施する場合には、双方の大学の時間割の違いへの対応、カリキュラム上の科目の位置づけを考慮した開講時期のすり合わせ等が必要である。大学設置基準における教育課程等特例を活用した他大学への提供準備を進めており、さらなる大学への拡大も計画している。

## 授業見学・教職員との意見交換（○：委員、■：教職員）

（授業見学：ファシリテーターとしての教員 I） 2 年次の必修科目（フラッグシップ科目）

現代においてファシリテーションが果たす意義や役割を理解し、教育ファシリテーションの理論的な背景、基礎に関する知識を学ぶ授業。8 回目（最終回）の総括では、少人数グループにて議論・発表の形式。教科ごとに 1 3 クラス編成。前半はフラッグシップ科目のコア部分、後半は各科目の教員から講義。全 8 回だが最初の 2 回はオンデマンド（理論を学ぶ）、3 回目以降は対面で授業。

（教職員との意見交換）

○ユニットの編成や教員の配置等ユニットの在り方について御教示いただきたい。

■未来教育共創推進総括本部に置く各部のもとにユニットを編成し、若手教員を中心に多くの教員が参画。授業開発に関するユニットが5つで、フラッグシップ全体では14ユニットで編成している。

○授業に携わる教員すべてが科目開発に参画しているのか。

■科目開発チームに授業を担当する予定の半数程度の教員に参画していただいている（兼任あり）。科目開発から携わることで授業観への影響を及ぼす等、教員全体の意識に変化が生じたように感じる。

○授業中の子どもたちの学びを見取るようなベーシックな学習評価、学習プロセスを見取るような要素があるとよいと考えるが、学習評価は授業において教えているのか。

■2年次の必修科目「教職専門性と省察」において1時間ではあるが実施している。繰り返し学びなおせるように、オンデマンド化して提供している。教師の主観をとおした子どもの学びとリアルなデータをいかにつないでいくかは今後の課題だが、重要性を理解した上で授業に取りこんでいる。

○「ファシリテーターとしての教員Ⅰ」のような科目を他大学に普及するとした場合、どういった教職課程のコアカリキュラムの在り方が大学として実施しやすいかといった意見があれば伺いたい。

■ファシリテーションの要素を既存の枠組みのなかに組み込むのは難しいと感じる。独立した科目として設けて、大学全体の共通科目として位置付けるのが得策だと考える。

また、小学校教科の科目部分を減じたものの、本学の強みとして、大多数の学生が中等教育免許を取得することを必修としているため、より多くの学生が副免許取得を目指すことから、減じた部分を大きく補っていると考えられ、結果的に教職を目指す学生を支援するカリキュラムとなっている。

学生との意見交換（一部抜粋）（○：委員、■①～④：学部2年次及び⑤教職大学院1年次の学生）

○フラッグシップ科目の目的や狙い等理解されているか。

■学期はじめに科目の目的や養成する能力について説明があるため、その点を意識して学んでいる。

○印象が残っているダイバーシティ教育科目群の科目はなにか。

■①・②「多様な子どもとインクルーシブ教育」。学校でのボランティアに従事する際に、多様な子どもの背景を理解・意識しながら接し、現場での気づきと結びつけて学ぶことができています。

③同上の科目。障害のある児童について学び、中学校（母校）のインターンシップの際に、障害の度合いが強い学級も担当補助することがあったが、障害のある生徒に対しての接し方、どういった手助けが好ましいかといった観点を学んでいたため、そういった観点から役立った。

④「ダイバーシティと教育」。表面的な観点ではなく、差別的なことや苦しいことが起こっている背景と向き合い、同時に自分自身についても問い直すということを学んだ。

○教職大学院において10単位分で先取履修をしているとのことだが、自分で科目は選べるのか。そのなかで印象に残った科目と参加して難しかったことはなにか。

■⑤いくつか候補があるなかで10単位分を自分で選択し履修した。1番印象に残っているのは、「子どもの貧困及び児童虐待の理解と教育実践」のフラッグシップ科目にて、貧困の子どもや児童虐待を受けている子どもたちの事例をもとに、どのようにアセスメントするか、学生同士で交流しながら学

んだ。夜間のオンライン授業を受講したので、現職教員学生と一緒にディスカッションした際に、実際の現場の考え方と当時現場にでていなかった自身が考える理論に差異があった。なお、現在は、週2回小学校の非常勤講師（小1・授業8時間分担当）、週4回スクールサポーターに従事している。

○特定4領域科目群の「教育データの活用」について率直な感想をお聞きしたい。

■①所謂文系なので「データ」ときくと身構えていたが、データをどのように授業改善に活かせるかといった活用方法を学べたのがよかった。たとえば、全国学力・学習状況調査結果についても、順位だけに注目しがちだが、授業改善への活用等データのもつ意味という理論的な観点から確認できるようになった。実際の学校現場でも効果的に活用をしていきたい。

②最初は子どものためにデータを活用するイメージだったが、それに加え、教師のための活用という方法があることも学べた。本授業の内容を受けずに現場に行くと困惑したのではないかと思う。

③数学専攻の立場では数学をより専門的に学べた。データをどのようにして教育に活かせるか、生徒の成績及び欠席の状況等、数学の観点から少し離れた教育全体としてのデータを集めて、どのように教育改善に結びつけるかといった点も学べて非常に役立った。

④国語専攻なので「データ」には抵抗があったが、授業でのルーブリック作成をとおして、評価の可視化や解析方法を学べたことが有益で、実践的に整理できるようになってよかった。

○ダイバーシティ教育については、所謂多様な背景が特段見受けられない子どもへの指導にも役立つことはあると感じたか。

■①受講前は特別な背景をもつ子どもに主に意識が行きがちになりそうだが、背景に関係なく全員に対して子どもの行動背景を意識することができるようになったと感じる。

④特段事情のないように見える人でも障害を抱えていたりして、目の前の1人1人に対して考え直す等多様性のとらえ方を深めるきっかけとなった。

○フラッグシップ科目を受講していない教職大学院生の立場から、本取組をどうとらえるか。

■⑤学部と大学院の科目が連結し、理論と実践の往還がより一層できている様子が見受けられる。

○入学前と現在で目指す教員像に変化はあったか。

■①学校がおもしろいと感じてもらえるような授業を展開できる教員。授業をとおして、教員がうまく話すだけでは不十分で、子どもに主体的な学びの姿勢をもっていただく必要があり、そういった授業づくりができるようになりたいと考えている。

②小学校で子供が安心して学ぶことができる環境を築く教員。省察の学びを経て、子どものことを1番に考えて子どもの視点にたって考える力が向上したと思う。

③数学の楽しさを教えることができる教員。特に苦手な子ども向けにどう教えるかより工夫したい。

④学びの楽しさを教えられる教員。そこにダイバーシティ教育の科目を学び、学びに向き合う姿勢をえたので、学校が好きではない子にもしっかり向き合いたい。

**大学関係者（責任者）との意見交換**（○：委員、■：大学側）

○企業と多数連携されているが、どういった連携をされているか等事例を伺いたい。

■オンデマンドでの教材開発、バーチャルスクールに係るコンテンツの開発等、他大学への展開も見据えて連携しながら進めている。

○これまでいろいろな取組の要素が散見されたが、今回のヒアリングをとおして、ダイバーシティ教育にとどまらない、学習者中心の考え方を具体化する形で大きく機能しはじめている様子が見受けられた。このあたりの状況の変化等伺いたい。

■学長指示のもと、他大学展開を見据え、1つに特化したモデルを示すよりも、学習者中心・対話を重視といったそれぞれの強みを持ちあわせた大学を意識して取組んできたことによるものとする。

○中学校免許や副免許にあげられるような充実したカリキュラムを設けているが、多様な学生がいるなかで、今後どのような対応が必要とお考えか。

■今後は専門性をもった教員を養成していく必要があると考えている。今回フラッグシップでの取組をとおして設けた「省察科目」が特に重要である。これまで教育実習においても振り返りはなされていたが、1年次と2年次において振り返りを体系的に学ぶ等省察をとおして自分自身の教職アイデンティティを育む仕掛けを構築している。科目を増やすのではなく、カリキュラム全体の目標に基づいて整理し、学生が選択できるようにすることが重要である。